岡山市広報連絡資料

令和6年9月18日

「世界かんがい施設遺産」に認定・登録された「建部井堰」の説明看板・記念碑の除幕式を開催します

令和5年11月4日に「世界かんがい施設遺産」に認定・登録された、江戸時代築造の石造取水堰「建部井堰」について、現地に説明看板と記念碑を設置し、これをお披露目する除幕式を開催するのでお知らせします。

1 日 時

令和6年9月26日(木)10時～11時(終了予定) ※荒天中止

2 場 所

建部井堰(北区建部町品田)
※位置図は添付のリーフレットにてご確認ください。

3 内 容

・参加者は岡山市長、市議会議員、岡山大学関係者、地元町内会長、地元小中学校長など、総勢約 50 名程度を予定しています。

・設置物の概要
▽説明看板 1基 (横 1770mm／高さ 1910mm／幅 78mm)
… 「建部井堰」の概要を2か国語(日本語・英語)で表記したもの

▽記念碑 1基 (横:約400mm／高さ約1300mm／幅約400mm)
…石柱に「世界かんがい施設遺産」登録盾のレプリカをはめ込んだもの

4 その他

・「建部井堰」の詳細については添付のリーフレットにてご確認ください。
・取材を希望する社は、駐車場所確保の関係上、9月24日(火)までに建部支所まで電話でご連絡ください。

【問い合わせ先】
岡山市 北区役所建部支所 板野・二宮 直通086-722-1111

江戸時代に築造された石造取水堰が今なお現役

【築造年代】

当地域の水田の水源は溜池であったが、1600年代に当地域を含む備前国全域で大洪水が発生し、多くの溜池が崩壊した。農業では旭川から直接水を引いた用水の方が、水稲耕作の安定化につながることから、この頃に備前国岡山藩主が建部井堰を築造し、用水路を敷設したものと思われる。

建部井堰の存在を示す史料は1721年が最も古く、それ以前に造られていることが確実であるが、施設の築造に関する史料は確認されていない。

また、1628～1630年に関係地域の米収穫量がかなり増加していることなどから、その頃に築造されたのではないかとの仮説もある。

【規模の概要特徴】

井堰の全長650m　最大幅45m　井堰から延びる幹線用水路全長7km

旭川の中央が備前国と対岸の美作国との国境であったことから、川を直角に横断し堰き止めることはできなかった。そのため隣国と結節しない、川の中央で途切れた「片持ち式」の斜め堰となっている。

当時の国境は大砲を備えるほど防備され、その証拠として1632年に備前国最北端のこの建部の地に岡山藩主の陣屋が設けられており、とても隣国と交渉ができる状況ではなかったと思われる。従って「片持ち式」にせざるを得なかった訳で、斜め堰である建部井堰は、水を多く取り入れるために延長を伸ばすと共に、水の抵抗を和らげるため堰本体の殆どが川と並行して造られている。そして「片持ち式」の堰を水害から守るため、強固な石張りが全面に施された極めて珍しい形態の取水堰である。

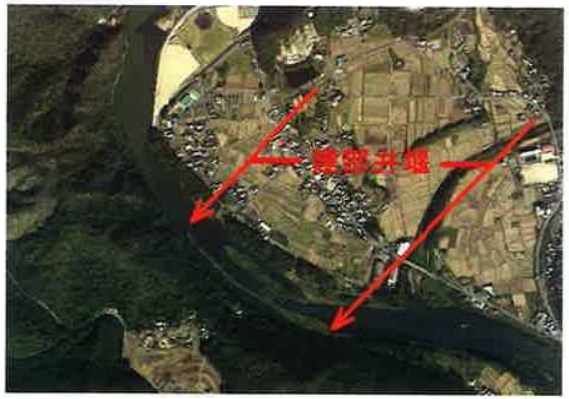
また全国で築造されたこの時代の大規模な取水堰は、コンクリートの固定堰もしくは鉄筋コンクリートの可動堰に改修・改築され、当時の面影を無くしたが、その中で建部井堰は築造当初のまま全面に石張りが残されており、現存する日本最大規模の石造取水堰である。

【指定内容】

現存する日本最大の農業用の石造取水堰で、現役ながらも江戸期の石張りが良好な状態で保たれているとされ、平成24年11月18日、公益社団法人土木学会の選奨土木遺産に指定された。

また、農業発展への貢献や井堰を造った技術に加えて、建部井堰は地域の人々の努力によって良好に管理され、江戸時代に造られた井堰が今もなお使われて、水を導いていることなどが評価され、令和5年11月4日、「世界かんがい施設遺産」に認定・登録された。

なお、令和6年2月20日、岡山市重要文化財（史跡）にも指定されている。



上空から見た井堰全景

登録証

登録盾

【お問合せ】
岡山市北区建部支所産業建設課
岡山市北区建部町福渡489　TEL086-722-1111
takebesanken@city.okayama.lg.jp

世界かんがい施設遺産
World Heritage Irrigation Structure in Japan

建部井堰

令和５年11月４日登録

旭川下流から見た井堰全景

上流から見た井堰全景

大小異形の石が見事に組み合わされている

流れに逆らわず、玉石により巻石施工されている

取水口を守る石組み

水の抵抗を考慮し強固に組まれた石組み

～ 現存する日本最大の農業用石造取水堰～

岡山県の三大河川の一つ、一級河川旭川（あさひがわ）の中流に位置する建部（たけべ）井堰（いせき）は、全長約650mで、現存する日本最大の農業用の石造取水堰である。堰本体の約500mは旭川にほぼ並行し、全面にわたって石組みがなされている。導水路側は整形された巨石が一列に並んでいるが、途中から旭川の本流に向かってなだらかに傾斜して、端部は石を円弧状に長く巻いて組み合わせることにより、断面を丸くした巻石構造となっている。一方、先端部の約100mは巨石による捨石構造で、川の中央に向かって大きく湾曲している。

また、旭川（あさひがわ）の中央が備前（びぜん）国と対岸の美作（みまさか）国との国境であったことから、川を横断して堰き止めることはできなかった。そのため隣国と結節しない、川の中央で途切れた「片持ち式」の斜め堰となっており、極めて珍しい形態も建部（たけべ）井堰（いせき）の特徴である。築造年代や誰によって築かれたかは明らかになっていないが、岡山藩（おかやまはん）の史料から1721年には既に存在していたことが確認できる。建部井堰が築造される以前は、かんがい用水を溜池に頼っていたが、豪雨によって溜池が被災したことを契機に、河川に取水堰を設け用水路を整備することによって安定的にかんがい用水を確保することが可能となり、以後300年以上もの間、100ヘクタールを超える建部（たけべ）平野（へいや）の水田を潤してきた。

全国で築造されたこの時代の大規模な取水堰は、コンクリートの固定堰もしくは鉄筋コンクリートの可動堰に改修・改築され、そのほとんどが当時の面影を無くしてしまったが、その中で建部（たけべ）井堰（いせき）は地域の人々の強い意志によって、当時の姿を遺している堰である。

【注】世界かんがい施設遺産（せかいかんがいしせついさん：World Heritage Irrigation Structures）は、インドのニューデリーに本部を置く国際かんがい排水委員会（International Commission on Irrigation and Drainage, ICID　世界の81の国と地域が加盟：2024.1月現在）が、灌漑の歴史・発展を明らかにし、灌漑施設の適切な保全に資することを目的として、建設から100年以上経過し、灌漑農業の発展に貢献したもの、卓越した技術により建設されたもの等、歴史的・技術的・社会的価値のある灌漑施設を登録・表彰するために2014年に創設された制度。

TAKEBE WEIR

～The Largest Existing Stone Weir for Irrigation in Japan～

The Asahi River is a class A river, which is one of the three major rivers in Okayama Prefecture. The Takebe Weir, which is located in the midstream of the Asahi River with the overall length of 650 m, is the largest existing stone weir for irrigation purpose in Japan. Approximately 500 m of the main body is almost parallel to the flow direction of the Asahi River and arrangement of stones across the entire area. Reshaped giant rocks form a line on the side of the conduit, but on the way, the weir gradually slopes toward the main stream of the river. The structure of the end part shows a round surface by combining the stones into a long parenthesis-shape. However, approximately 100 m of its apex is constructed to reduce the force of water by placing rocks into the water and largely curves toward the center of the river.

In addition, because the Asahi River was at the border between Bizen Province and Mimasaka Province, it was impossible to intercept the river crossing at a right angle. Therefore, it has the structure of a diagonal weir that did not ground the neighboring province and broke off in the center of the river, which is also one of characteristics of the Takebe Weir.

The precise date of construction and architects have not been verified; however, its existence has been confirmed in the archives of the Okayama clan that the weir had been present in 1721. Before Takebe Weir was built, people depended on reservoirs as the source of water for irrigation, but with torrential rainfalls that destroyed reservoirs, they built the weir and maintained the irrigation channels, which allowed them to stabilize the water for irrigation. The weir has steadily supplied water to over 100 ha of paddy fields on the Takebe Plain for over 300 years.

The massive weirs for irrigation constructed all over Japan during this era were improved/renovated into fixed concrete dams or ferroconcrete weirs with gates, and appearances from those days have been lost in many parts of Japan. However, Takebe Weir retains its original figure with the strong will of the people in the region.